

飯倉 泉

* 登場人物

野村竜二（58・7） 社員
野村夕子（57） 竜二の妻
光山卓也（39） 竜二の会社の部下
安田大介（7・50） 竜二の幼なじみ
山口真理（7・58） 竜二の幼なじみ
高田保夫（30） 竜二の新入社員時の上司

* 梗概

札幌在住の社員の竜二は部下の光山と飲んだ夜、思わぬ交通事故に遭い、病院のICUに運ばれ、昏睡状態に陥る。そして光山が付き添うICUに竜二の妻・夕子が駆け付ける。竜二には二人の会話が微かに聞こえた。竜二は深い闇の中で川のせせらぎを聞き、三途の川だと思いが、川で魚捕りをする七歳の竜二と幼なじみの大介と真理の映像を見る。そして生まれ故郷の小樽の雪の地獄坂で、“去れよう 去れよう 去らねば 山からモンコ（怪物）くるぞ”と歌いながらソリ遊びをする三人の映像を見る。その後、竜二は深い闇の中で三年前に他界した大介や、青春時代に恋心を抱いた真理との過去を思い出す。竜二は深い闇の中で再び川のせせらぎを聞き、浅瀬の川を見る。いよいよその時がきたと悟った竜二は、川を渡り始める。すると向こう岸に七歳の頃の大介が現れる。大介は竜二に、“去れよう 去れよう”と歌い消える。そして竜二の意識が戻り、夕子の顔を見る

けたたましい救急車のサイレン音。

野村竜二(58)のM「人生最大の不覚だ……。会社帰りに飲んで、こんな酷い交通事故に遭うとは……」

救急車のサイレン音が続く。

竜二のM「暗い、何も見えない……。俺はど
うなるんだ……」

ICUのモニター機器の稼働音。
駆け込んでくる靴音。

野村夕子(57)「あなた！」

光山卓也(39)「奥さん、何度も自宅に電
話をしたんですが」

夕子「今夜はダンス教室の日で。それで帰宅
して留守電をきいたら……。光山さん、主
人は？」

光山「意識不明の重体です……」

夕子「もうだめなんですか……」

光山「担当の先生が言うには、今夜一晩がヤ
マだと……」

竜二のM「微かに聞こえる。女房の声も、光
山の声も。やはり俺は死ぬのか……」

微かに川のせせらぎ。

竜二のM「あれは三途の川か……。死後七日

目に渡ると聞いていたが……。浅瀬のよう
だ。俺も渡ることになるのか……」

タイトル「今の向こう側」

モニター機器の稼働音。

夕子「どうして、主人がこんな……」

光山「僕が悪いんです。一緒にあんなに酔う
まで飲まなければ、車に接触することもな
かったのに……」

夕子「普段お酒を飲まない主人が、今日に限
ってどうして……」

光山「それは……」
夕子「私が悪いんだわ。今夜はダンス教室の
日だから、食事は外ですませてきてなんて
言っただから……」

光山「違うんです。本当は……」

竜二のM「光山、言うな。俺は死ぬんだ。そ
の事は女房に知られないまま死にたい……」

川のせせらぎ。

竜二のM「この川を渡れば、もう帰って来ら
れないのか……」

小川の中で、竜二(7)、安田大介(

7)、山口真理(7)が歓声を上げ、
水をかけ合う。

竜二のM「これは……。小学校に入学した頃

の俺と、近所の幼なじみの大介と真理だ。
よく陽が暮れるまで魚捕りをして遊んだな
……。これは死ぬ時、これまでの人生を走
馬灯のように見るってやつか……」

小川の中で何かを捕まえる。

大介「竜二、捕まえた！」

竜二「大介、でかい魚か？」

大介「手の中で長いのがヌルヌルしてる」

真理「うなぎ？」

竜二「こんな所に、うなぎがいるかよ」

真理「大ちゃん、早く水の中から出して見せ
て」

大介、恐る恐る水の中から、手に持つ
物を出す。

竜二「……うわっ、へびだ！」

真理「きゃあー！」

大介「うわー！」

大介が放り投げる。

三人、小川の中を駆け去る。

竜二のM「楽しかったな、あの頃は……。大
介は三年前、三途の川を渡った。俺も渡れ
ば、またあの頃と同じように大介と遊べる
のだろうか……」

モニター機器の稼働音。

夕子「光山さん、主人に何があつたんですか？」

光山「……野村部長、今日の午後、取締役と呼ばれて」

夕子「それで？」

光山「……言われたんです」

夕子「何を言われたんです？」

光山「……今年いっばいをもっての退職を」

夕子「リストラ……ですか。あんなに会社のために身を粉にして働いて、定年まであと

わずかな主人が、どうして……」

光山「野村部長も寝耳に水だった。僕だって

信じられなかった……」

夕子「それで主人、普段飲まないお酒を……

光山「ええ……。帰り際、野村部長に酒に誘

われて。部長、決して強くないのに、あんなに飲んで泥酔して……。僕がタクシーを

止めようとしている間に、部長はフラフラ

と車道に出て。そこに車が……」

竜二のM「何だ、光山。リストラされたことを女房に言っちゃまったのか……」

吹雪の音。

竜二のM「一面の銀世界……。これは俺が生まれ育った小樽の街だ。この坂……。地獄坂だ。ここでよく俺と大介と真理でソリに

乗って遊んだんだ……」

竜二(7)・大介(7)・真理(7)「(歌う)“去れよう 去れよう 去らねば 山からモノコ(怪物)くるぞ”」

竜二のM「そうだ。ソリで滑り降りる時、人にぶつからないように、“去れよう 去れよう”と歌って、坂を上ってくる人に注意

を呼びかけたんだ。いつも大介が前、カジ取りの真理が後ろ、体の小さな俺は真ん中

だった」

ソリが雪面の坂を滑り降りる音。

竜二のM「いつも命知らずに、高い所から滑り降りたんだ。ものすごいスピードに涙が出て、あまりの怖さに悲鳴を上げることも

あつたな……」

竜二・大介・真理「(悲鳴)」

ソリがひっくり返る音。

竜二のM「よく電柱に衝突して、ひっくり返って、警察のおっちゃんに怒られたんだ」

小さく『仰げば尊し』の歌声。

竜二のM「これは小学校の卒業式か……」

男「野村竜二君！」

竜二(12)「はい！」

壇上への階段を昇る靴音。

竜二のM「卒業文集の自分の将来の夢に、何と書いたんだろう……。そうだ、スキートのジャンプ選手になって、オリンピックで金メダルをとると書いたんだ……」

男「山口真理さん！」

真理(12)「はい！」

竜二のM「この頃だった。初めて恋をしたのは……。俺は真理に淡い恋心を抱いていた……」

スキーが急斜面を滑降する。そして空中に飛び立つ。

竜二のM「中学でスキー部に入った俺は、ジャンプ競技を始めた」

雪道を並んで歩く靴音。

大介「真理、受験する高校は決めたのか？」

真理「私は北洋高校。大介は？」

大介「俺もだ。竜二、お前も北洋だろ？」

竜二「俺はそんな所は無理だ。スキーばかりしてて、ちっとも勉強してないし」

竜二のM「中学の三年間、俺は真理に想いを打ち明ける事ができなかった。そして卒業式の日の朝、俺は思い切って、真理を体育館の裏に呼び出した」

館の裏に呼び出した」

木々が風に揺れる音。

真理「……ありがとう。でも竜ちゃんの、その気持ちに応えることができないの……。」

わたし、他に好きな人がいるの」

竜二「……大介か？」

真理「……うん」

竜二のM「十五歳の春の失恋だった……」

駅のホームの雰囲気。

竜二のM「これは高校入学直後の通学途中の駅のホームだ……。向かいのホームにいるのは大介と真理だ……」

大介「あれ、竜二じゃないか！ 今日学校帰りに付き合わないか！」

真理「竜ちゃん、久しぶりに三人でお茶でもしようよ！」

竜二「いや、俺……」
大介「何だ！ 聞こえないぞ！」
竜二「俺、スキークラブがあるんだ！」

竜二のM「大介と真理は、隣町の進学校の北洋高校に進学した。俺は滑り止めで受かった逆の隣の高校に入った。俺は真理の事もあり、何となく二人に引け目を感じていた。次の日から、俺は駅で二人に会わないように、三十分早く家を出るようになった……。そして、徐々に二人とは疎遠になっていった……」

スキーが猛スピードで斜面を滑降する
そして空中に飛び立つ。

竜二のM「高校一年の冬、俺は初めて九十メートル級のジャンプ台を飛んだ」

空中で風を切る音。

竜二のM「突然視界に札幌の街が飛び込んできた。怖かった。でも鳥のように、どこまでも飛んで行けるような気がした。そして自分の未来の可能性も、この大空のように大きく開けていると感じていた……」

スキーが雪面に着地し、滑る。

竜二のM「俺のジャンプの成績は良く、冬の国体への出場も決まった」

雪道を歩く靴音。

竜二のM「あれは国体開会を十日後にひかえた、練習からの帰り道だった……」
真理「竜ちゃん！」

後方から駆けてきた靴音が追いつく。

竜二「真理……」
真理「竜ちゃん、国体出場おめでとう。私も応援に行くわ」

竜二「どうしたんだ？ その顔のアザ」
真理「去れよう 去れよう 去らねば 山からモンコくるぞ」って、いつもソリで真ん中に乗って歌ってた一番おちびの竜ちゃんが、国体出場だなんて一番出世だね。オリンピックだって夢じゃないわ」

竜二「……真理、大介と何かあったのか？」
真理「……子供の頃のようにもう一度、三人でソリに乗って遊びたいな」

喫茶店の店内の雰囲気。
扉が開き、入ってくる靴音。

大介「いらつしやいませ。おう！ 竜二、久しぶりだな。国体出場やったじゃないか」
竜二「大介、ちょっと顔をかしてくれ」

雪道を歩く靴音。
後ろから、靴音が小走りにくる。

大介「どうした？ 竜二。真理と話してたんだ。茶店のバイトを休んで、二人でお前の応援に行こうって」

竜二が胸倉を掴んだ音。

大介「な、何するんだ……」
竜二「お前、真理に何をした」
大介「ああ、あの顔のアザか。ちょっと殴ってやった」

竜二「どうして殴った？」

大介「あんまり、あいつがお前の事をはしゃいで言うからよ。国体出場だ、竜二はえらいとか。俺の女なのによ」

竜二「それだけで……。貴様」

竜二が大介の顔面を殴った音。

大介が雪道に倒れ込んだ音。

大介「（冷笑し）真理から聞いた。お前、中学の卒業式の日、あいつに告ってフラれたんだってな。俺たちからコソコソ逃げるんで、変だと思ってたんだ」

竜二「……逃げたわけじゃない」

大介が立ち上がり、胸倉を掴んだ音。

大介「真理がほしけりや、俺から奪い取ってみろ。てめえ、ちよつとジャンプやってるからって、いい気になるんじゃないぞ」

大介が竜二の顔面を殴る。

竜二と大介が殴り合う音。

竜二が壁に体をぶつけ、倒れ込む音。

大介も倒れ込んだ音。

大介「（荒い息遣い）……久しぶりだな。こうして殴り合ったの」

竜二「（荒い息遣い）ああ、ガキの頃以来だ。何だかスツとしたぜ。あつ、痛て」

大介「どうした？ 竜二。右ヒジを押さえて

竜二のM「右ヒジの骨折だった。国体出場も消えて、俺の十八歳の青春は終わった……」

吹雪の音。

竜二「地獄坂でソリするの、何年ぶりかな？

大介「八年ぶりだ」

真理「大介が前、カジ取りの竜ちゃんが後ろ

今では一番おちびの私が真ん中。よし！」
竜二・大介・真理「（歌う）“去れよう 去れよう 去らねば 山からモンコくるぞ”

ソリが坂を滑り降りる。

竜二・大介・真理「（悲鳴）」

ソリがひっくり返り、三人が雪の中に投げ出された音。

竜二・大介・真理「（笑う）」

竜二のM「俺たちの関係はずっと幼なじみのままだった……」

並んで歩く靴音。

大介「竜二、就職してもジャンプは続けるんだろ？」

竜二「ジャンプは高校で終わりだ」
真理「やめちゃうの。どうして？」

竜二「もう充分やった。それにひとつの目標も達成したし」

真理「目標って、国会出場？」

竜二「ああ。観客席で見てただけけど」
大介「悪い事をしたな。あんな殴り合いをしなれば……」

竜二「いいんだ。みんな、いい思い出だ」

真理「これから、みんなバラバラになっちゃうんだね……」

大介「竜二は札幌で就職だし」

竜二「大介は東京の大学か？」

大介「ああ。東京で四年間、しつかり遊んでくるぜ」

竜二「真理はどこに大学に？」

真理「私は仙台……。大人になっても、またこうして三人で集まって遊ぼうね」

大介「分かった、約束だ。竜二もいいな」

竜二「ああ、約束だ」
竜二のM「その約束が果たされる事はなかった……」

スキーが猛スピードで斜面を滑降する
そして空中に飛び立つ。

竜二のM「ジャンプはやめた。でも、あの空に飛び立った時のように、自分の未来は大きく開かれていると信じていた。あの頃は……」

喫茶店の店内の雰囲気。

客たちの会話がうるさい。
1972年札幌冬季オリンピックピックの7
0メートル級ジャンプ競技のテレビ中
継音声。

高田保夫(30)「野村、ちよつと会社に電
話してくる」

竜二「あつ、はい」

席を立ち、レジの方へ向かう靴音。

アナウンサーの声「さあ、笠谷」

客たちの会話が静まる。

アナウンサーの声「笠谷、飛んだ！ 決まっ
た！」

客「よし！」

竜二「やった……」

竜二らが立ち上がり、歓声と拍手。

戻ってくる靴音。

高田「おい、野村、何してる。次のあいさつ
回りに行くぞ」

竜二「あつ、はい」

高田「今度はちゃんと名刺をすぐ出せるよう
にしておけよ」

竜二のM「就職して八年目、二十六歳の時に
俺は今の女房の夕子と結婚した。そして、
高卒の俺は大卒の連中に負けまいと必死に

働いた。周りからは仕事中毒だと言われた
でも、それは家族のためでもあると信じて
いた……。大介から会社に電話があったの
は、定年を意識し始めた八年前だった。そ
して俺たちは、二十数年ぶりに会った……

居酒屋の雰囲気。

竜二「とにかく乾杯だ。久しぶりの再会を祝
して」

大介「ああ」

ビールのジョッキをぶつけ合う音。

竜二「びっくりした。お前から電話があった
時は」

大介「本社で研修で、昨日札幌に出て来たん
だ。久しぶりにお前の顔を見たくなくてな
でも、元気そうで良かった」

竜二「……お前、少し疲れていないか」

大介「この一年で色々な事が、いっぺんに起
きたから……。前の会社にクビを切られ
てしまったり……」

竜二「……リストラか」

大介「ああ……。それで何とか今の会社を見
つけたんだ」

竜二「そうか……」

大介「お前、部長代理なんだってな。電話口
で呼び出す時、そう聞こえた」

竜二「俺も数年先には、どうなっているか分

からんよ。それにここまでくるのに、家族
とか色々な物を犠牲にしてきた……。大介
の家族は元気なのか？」

大介「……女房とは半年前に別れた。子供は
女房の所にいる」

竜二「そうなのか……」

大介「……二ヶ月前、偶然立ち寄ったスーパ
ーで、真理に会ってな」

竜二「真理に……」

大介「ああ……。お互い結婚して以来会って
なかったから、二十一年ぶりだ……。あい
つ、パートでレジに立っててな……」

竜二「……真理は元気そうだったのか？」

大介「……昔の輝きがなくなっちゃまっていた
あいつも不幸な女だ」

繁華街の雰囲気。

千鳥足で歩く、ふたつの靴音。

竜二「おい、大介！ 次の店にいくぞ！」

大介「なあ、竜二。お前、最近恋をした事が
あるか？」

竜二「恋？……。自慢じゃないが、俺は女房
一筋だ」

大介「だったら、仕事ばかりしてないで、家
族を大切にしてくれ」

竜二「お前、恋をしているのか？」

大介「……してる」

竜二「誰だ、相手は？」

大介「それはヒ・ミ・ツだ」

竜二「若い女か？」

大介「ああ、若くて飛び切りいい女だ」

竜二「どこでひっつけたんだ、そんな女」

大介「ひっつけた？ 人聞きの悪い事を言うんじゃないぞ」

竜二「俺に一度会わせろ。今度札幌に来る時連れて来い」

大介「ああ、会わせてやる。びっくりするぞ本当にいい女だからな」

竜二「よし！ カラオケに行こう。俺が中年おやじの恋の応援歌を歌ってやる」

大介「ああ……。でも、もうこの辺でお開きとしてくれ。明日、朝早くから会議なんだ

駅のコルコースの雰囲気。

やってくる、ふたつの靴音。

竜二「大介、又札幌にくる時は連絡をくれ」

大介「ああ……。竜二も体に気をつけて、家族を大切にしてくれ。じゃあ」

行きかけた靴音が止まる。

大介「……なあ、竜二」

竜二「何だ？」

大介「……いや、何でもない」

歩き出した靴音。

竜二のM「改札を抜けホームに入った大介の

背中が小さかった……。ガキの頃の大介の背中をもっと大きかった……。これが、大介の姿を見た最後の時となった……」

モニター機器の稼働音。

竜二のM「あの電話があったのは、三年前の

夏の終わりだった……」

活気のあるオフィスに電話が鳴る。

光山「(出て) はい、山西電工第一開発部で

す。……はい、少々お待ちください。部長安田さんという女性の方から外線です」

竜二「安田？……。(受話器を取り) はい、野村ですが」

真理の声(電話)「……私、真理です」

竜二「真理……。真理なのか？ どうした？ 真理の声(電話)「……今朝の五時三十一分

に、小樽の××病院で大介が死にました」竜二「大介が……」

並んで歩く靴音。

竜二「こうして地獄坂を真理と歩くのは、三十数年ぶりだ」

真理「そうね……」

竜二「なあ、真理。腕を組んでくれないか？ 真理「え……」

竜二「こうして腕を組んで、天国の大介を怒

らせてやるんだ」

真理「怒らせるって？」

竜二「八年前大介と札幌で飲んだ時、あいつホレた女がいるって言ってた。それは真理だった。けど大介の奴、俺に大嘘をついたんだ。だからこうして怒らせてやるんだ」

真理「若い頃、よく二人でケンカしたわね」

竜二「ああ。殴り合いのケンカができるのは長い人生であいつだけだった」

真理「……私、大介が死んだ日に、竜二さんに電話した時、怒られると思っていたの」

竜二「どうして？」

真理「私の結婚が壊れかけていた時、大介と久しぶりに再会して、その二年後に二人が再婚同士で籍を入れた事を、竜二さんに報告していなかったし、病床の大介に会って

もらうこともなかったから……」

竜二「あいつが嫌がったんだらう。弱った姿を俺に見られるのを」

真理「ええ……」

竜二「あいつらしい……」

真理「ねえ、娘さんの結婚は？ この間、電話で言ってたじゃない」

竜二「ああ。結納をすませた」

真理「そう。これでひと安心ね」

竜二「いや、まだまだだ。下の息子がブラブラしているし、それに仕事一筋で、女房に苦労ばかりかけてきたからな。娘の結婚式が終わって落ち着いたら、温泉旅行にでも連れてってやろうと考えているんだ。孫の

顔だつて見たいし、俺はまだ当分、死ぬことはできませんよ」

微かに川のせせらぎ。

竜二のM「先に見えるのは三途の川か……。どうやら、その時が来たようだ。浅瀬のようだ。俺にも難なく渡れそうだ……」

川のせせらぎ。

竜二のM「向こう岸が見える……。あれがこれから行く向こう側の世界か……」

川のせせらぎが大きくなる。

竜二のM「いよいよだ……。夕子、光山、今までありがとう……。俺は川を渡る」

竜二が川を渡り始める。

竜二のM「……もやに霞む向こう岸に誰か立っている」

川を進む竜二が立ち止まる。

竜二のM「向こう岸に立っているのは、ガキの頃の太介だ……。俺を迎えにきたんだ。太介、俺はお前に腹を立てているんだ。俺に黙って、真理と籍を入れやがって。また

殴り合いのケンカをするか」
竜二「太介！」

竜二が足早に川を進む。

竜二のM「俺も向こう岸に行けば、ガキの頃に戻れるのか」

竜二「太介、また一緒に日が暮れるまで魚捕りをして遊ぼうぜ。ケンカもしようぜ」

竜二が川を進む。

大介（7）「（歌う）“去れよう 去れよう 去らねば 山からモンコくるぞ”」

竜二「太介、ソリ遊びがしたいのか。いいぞ 毎日つき合ってやるぞ」

竜二が立ち止まる。

竜二のM「太介が背を向け、歩き出した……」

竜二「おい、太介！ 待ってくれよ！」

竜二が駆け出す。

竜二のM「太介が振り向いた」
大介「去れよう！ 去れよう！」
竜二のM「太介は消えた……」

川のせせらぎが消える。

竜二のM「見えた……。女房の夕子の顔が」
光山「奥さん、野村部長の意識が！」
夕子「あなた！」

〈終〉

〈執筆のための参考資料〉

『去れよう 去れよう 去らねば 山からモンコ（怪物）くるぞ』の歌を「小樽」（朝日新聞社小樽通信局編。北海道教育社）より参考。